

私が産業カウンセラー養成講座の門を叩いたのは、2018年の秋。私は50歳という年齢の節目を目前に控え、今までの人生経験を生かしつつ、何か新たなことに挑戦してみたい、という思いを巡らしていた。

そして、数ある選択肢の中から選り抜いたのが「産業カウンセラー」である。今回は、その動機などについて、この資格の特徴など

ナビゲーター

も交えながら記しておきたいと思う。

産業カウンセラーを目指したきっかけの一つとして、私の勤務する会社でも「健康経営」に向けた気運の高まりがあったことが挙げられる。

「健康経営」は、働く人々の心身の健康に積極的な投資を行うことを企業ミッションの一つとして捉えるものである。活力ある労働

6

産業カウンセラーの現場から

相談者の思いに共感して伴走する

「こころ」に向き合い、寄り添う

環境の実現を通じて、医療費の削減や企業業績の向上を図るもので、昨今の人手不足問題や労働者の高齢化問題に対する有効な処方箋とされる国策の一つだ。

時代の潮流を捉えたスキルを学び、共に働く人々のこころに寄り添うことが出来る、そんなキャリアを身に付けたい。受講する範囲は心理学から労働法規の理解など、メニューは多岐にわたっていたが、手ごたえのある資格取得を通じて企業に、そして社会に貢献したい。これが産業カウンセラーを志した私の動機の一つである。

産業カウンセラーの資格を取得してから、時折、「産業カウンセリングは人生相談と何

産業カウンセラーを選んだ理由

が違つか？」という質問を受ける機会があった。

「相談業務」の一つに「カウンセリング」も分類されている通り、私は、広い意味で使われる相談にはカウンセリングも含まれていると解釈している。

ただし一般的な「人生相談」には、相談をする側と受ける側にあらかじめ上下関係が存在する。一方「産業カウンセリング」は、カウンセラーとクライアント（相談者）の間に上下関係はない。これが大きな違いである。

人生相談では、基本的に目上の人間が持つ知識や経験などを基準にした助言・提案が行

われるが、産業カウンセリングでは、カウンセラーがクライアントとフラットな関係を築きながら、共同で悩みや苦悩の根源を最深部までたどってゆく過程で幾つかの解決策を導き出すのである。

産業カウンセラーは「こころを聴くプロ」である。こころには色や形がない。またこころは、多様性に富み、さまざまな個人差が存在しているものの、こころそのものの価値に優劣は無い。

実体が存在しないこころに向き合い、寄り添って支援することに特殊な機能を発揮する産業カウンセリングは、実践能力が問われる資格でもある。

これが、産業カウンセラーを目指したいと思った動機のもう一つの理由だ。

【日本産業カウンセラー協会中部支部会員
産業カウンセラー 寺内誠】

(火曜日に掲載)

